

ふらつき、食欲不振、めまい、ふるえ、ED

逆引きリスト あなたの不調

(右から) 清益氏、徳田氏

特に高齢者は薬の成分が残りやすいため、こうした薬を飲んでいると夜中トイレに起きた時などに朦朧として転倒しやすいだけでなく、昼間でもウトウトしたり、ふらつたりしやすいのだ。

特に高齢者は薬の成分が残りやすいため、こうした薬を飲んでいると夜中トイレに起きた時などに朦朧として転倒しやすいだけでなく、昼間でもウトウトしたり、ふらつたりしやすいのだ。

動きがぎこちない

何かの薬を飲んでいる高齢者の中には、体の動きがぎこちない、歩きにくく転びやすいといったパークinson病に似た症状に悩む人もいる。もしかしたら、「薬剤性パークinson症候群」かもしれない。

抗精神病薬や抗認知症薬などが原因となることが多いが、高齢者に意外と見られるのが胃・十二指腸潰瘍治療薬「ドグマチール」によるものだ。金沢大学附属病院総合診療科特任教授の野村英樹医師が話す。

「この薬はうつ病や統合失調症などにも使われるのですが、食欲増進作用があることから、「食欲がない」という高齢者にしばしば処方されています。

状がどんな薬によって引き起こされ得るのか。それを知つて初めて、「毒」ではなく「薬」にするための、正しい付き合い方ができる!しかし、パークinson症候群が出てしまうことがある。認知症では暴れる、すぐ怒る、暴力をふるうといった症状で困っている家族も多いが、それは抗認知症薬が原因になつていて可能性がある。ドネペジルなどの抗認知症薬には覚醒作用があり、興奮しやすくなることがあるからだ。抗認知症薬を中止すると、穏やかになることが多いという。

事のたびによだれが止まらないという人がいました。ご本人や介護者は認知症の症状の一つだと思いつ込んでいたようですが、投与量を半分に減らしたところ、よだれが改善。多すぎるとそれが薬剤による影響を疑つてもよいように思います」

抗認知症薬には食欲不振の副作用もある。そもそもフランスでは保険適用から外されるなど、医療界では有用性に疑問符が付き始めている。メリットが感じられないようなら、中止を検討してみるべきだろう。

めまい、眼気

近年、帯状疱疹後神経痛や手足のしびれを伴う痛みなど、「神經障害性疼痛」に処方されることの増えたプレガバリンという薬にも要注意だ。戸田整形外科リウマチ科クリニック院長の戸田佳孝医師が解説する。

「ほとんどのしびれは原因不明のため、対症療法とい

でわかる は「薬の副作用」

ジャーナリスト
鳥集徹

(右から) 戸田氏、長尾氏

ふらつく、食欲がない、筋肉がこわばる、下痢や嘔吐が止まらない——そんな謎の症状が続くんや、薬を飲んでも一向に治らず、困っている人が読者の中にもいるのではないだろうか。

もしかするとそれは、あなたが飲んでいる「薬のせい」かもしれない。

薬に副作用があることは誰もが知っている。医療機関を受診した際や、調剤薬局で薬をもらう際に、医師や薬剤師から副作用の説明も受けるはずだ。だが自分の飲んでいた薬にどんな副作用があるか、詳しく覚えているだろうか。

実際医師に話を聞くと、自分の悩まされている症状が薬のせいだと気づかない患者は多い。加えて医師も薬のせいだと疑わず、患者が訴える症状を抑えるためにさらに薬を追加し、余計に薬の副作用が増幅されてしまうことがある。

こうした泥沼の事態を防ぐために、どんな症状が薬によって引き起こされる可能性があるか、知っておいたほうがいい。そうすれば

副作用に早く気づき、適切な対応を取れるだろう。そこで今回も薬に詳しい医師や薬剤師に取材。薬によって起こりうる症状を一覧表(三七頁)にまとめたので、ぜひ参考にしていただきたい。

ふらつき、転倒

会い、慌てて対応します」実は、七十五歳を超えるほどの高齢者は、心機能が衰えるなどして、自然と血圧が低くなる人が増える。また薬の成分を分解・排泄する肝臓や腎臓の機能も衰えるので、薬が長く体内に残って、効きやすくなる。

ところが本人も医師もそれに気づかず、血圧が高かった頃の、何年も前の処方のまま、降圧薬を飲み続ける人が多いというのだ。

「そのような人は降圧薬を減量か中止すると、とたんに元気になります。ずっと同じ降圧薬を飲み続けていた人は血圧が下がり過ぎになつていいいか、家で血圧を測るなどして確認してください」(同前)

「ふらつきや転倒を引き起こす薬は他にある。たとえば、アレルギーを抑える薬で、風邪薬(総合感冒薬)にも含まれる抗ヒスタミン薬や、ベンゾジアゼピン系・非ベンゾジアゼピン系の睡眠薬(抗不安薬)などだ。介護施設で血圧を測ると、上の血圧が100mmHgを切るほど下がって元気をなくしている人にはしばしば出る。あなたの悩んでいるその症状、実は飲んでいたる薬のせいかもしれない——まさに盲点だが、それがあるのが薬というもの。どんな症

薬によって起こりうる症状の例

主な症状	投与対象の病気	考えうる薬の種類
・ふらつく ・認知機能低下など	高血圧	降圧薬全般
・暴れる ・暴力をふるう ・よだれを流すなど	認知症	抗認知症薬 ドネペジル ガランタミン リバスチグミン メマンチン
・体の動きがぎこちない ・手足の筋肉がこわばる ・硬直して転びやすいなど	食欲不振	胃・十二指腸潰瘍治療薬 ドグマチール
・めまい ・意識障害など	神経の痛み	神経障害性疼痛治療薬 プレガバリン
・不安 ・焦燥感 ・パニック発作など	慢性腰痛	SNRI デュロキセチン
・手足が震える・動悸がする ・冷や汗が出るなど	糖尿病	SU薬全般
・筋肉がやせる ・筋肉痛、筋力低下 ・こむらがえり ・肝機能障害 ・糖尿病悪化など	脂質異常症	スタチン アトルバスタチン ピタバスタチン ロスバスタチンなど
・下痢 ・発熱	感染症	抗生素質全般
・日焼け ・肩こり・腰痛など		湿布薬 ケトプロフェンを含むもの
・消化管出血 ・心不全など	痛みや炎症、発熱	消炎鎮痛薬 とくにロキソプロフェン
・ぜんそくの悪化	痛みや炎症、発熱 咳	消炎鎮痛薬 中枢性鎮咳薬
・ED(勃起不全)	脂質異常症 高血圧 うつ病 AGA(男性型脱毛症) 前立腺肥大症	スタチン、フィブラーート系薬 降圧薬 抗うつ薬 5α還元酵素阻害薬

*他にも様々な症状が薬によって引き起こされる可能性があるので、「薬のせいでは?」と思い当たる症状があった場合には、主治医や薬剤師に相談してください。

う気持ちでこの薬を処方する医師がたくさんいます。しかし、この薬にはめまい、眠気、意識消失などの副作用がある。以前、私のクリニックを受診した患者さんも、最大用量である八錠を飲んでいて、起きている間ずっとボーッとしている」と話していました」

実は、この薬を飲んだ人が交通事故を起こしたという事例も報告されている。高齢ドライバーによる事故多発も問題視されているだけに、この薬を飲んだら絶対に運転しないでほしい。

不安、焦燥感

手足の震え、動悸

手足が震える、動悸がする、冷や汗が出るといった症状を経験した場合に疑ってほしいのが、糖尿病薬(血糖降下薬)による低血糖だ。重篤な場合にはいけれんや昏睡状態に陥り、死に至ることもある。そのため近年は、低血糖を起こしにくい薬が使われることが増えた。しかし今も低血糖を起こしやすいSU薬(スルホニル尿素薬)などの糖尿病薬を処方している患者が多い。長尾医師が話す、「七十五歳以上の高齢者の血糖コントロール目標は一六年に緩められ、ヘモグロビンA1c(一、二ヶ月前)

筋肉の痛み

下痢、嘔吐

高齢者には筋肉の衰えがあるようになり、処方が増えているという。長尾医師が話す、「七十五歳以上の高齢者の血糖による合併症以上に、低血糖に注意すべきです」

皮膚の異常

抗生物質は「薬疹」も起こしやすいが、たかが皮膚の症状だからと侮ってはいけない。命を落とすこともあるからだ。

「重症化すると粘膜がただれ、全身の皮膚がむける『ステイーブンス・ジョンソン症候群』や『中毒性表皮壊死症』を起こし、早期に適切な治療を受けないと多臓器不全に陥ることがあります。赤いブツブツやか

に抗うつ薬が効く場合もあります。しかし、この薬は、不安や焦燥感、パニック発作などの精神症状引き起こすことも報告されている。実際に私も、この薬を飲んでいるのに腰痛が一向に治らず、不安ばかり強

スタチンはいい薬だが:

に抗うつ薬が効く場合もあります。しかし、この薬は、不安や焦燥感、パニック発作などの精神症状引き起こすこともあります。実際に私も、この薬を飲んでいるのに腰痛が一向に治らず、不安ばかり強

くなつたと訴える患者さんを診たことがあります。慢性腰痛に安易に処方する傾向が強いのですが、本当に精神的ストレスが要因になっているのか、慎重に見極めたうえで処方すべき薬だと思います」(同前)

「スタチンは心筋梗塞を予防するいい薬なのですが、一方で肝障害や糖尿病を悪化させるリスクも報告されています。

「でも、肝障害や糖尿病を悪化させると命を落とす危険性もあるので、抗生物質を飲んだ後に水や粘液状の下痢が続いたり、熱、血便などが出たりした場合は、急いで病院に行つてください」(同前)

ゆみ、はれ、水ぶくれなどが全身に広がった場合には薬も疑って、早めに主治医に伝えてください」（同前）

皮膚の症状は湿布薬でも起る。湿布をすでに使つていなくとも、しばらく経つてから貼つた部分が日焼けのようになつたり、点々と出血したような症状が出ていた場合は注意してほしい。戸田医師が指摘する。

「とくに問題なのが、ロキソブロフェンです。腰痛や

骨折後に飲み続けて腎不全や心不全を起こし、救急車で運ばれた高齢患者を立て続けに二例経験したことがあります。幸い命は取り留めましたが、腎機能は元の

レベルには戻りませんでした。作用が強いので使つくなる気持ちはわかりますが、飲むとしても一ヶ月間に留めるべきです」

この薬はドラッグストアでも市販されているが、安易に使える薬ではない。とにかく高齢者は腎機能が落ちている人が多いので、痛み止めを飲むなら比較的安心できるアセトアミノフェンの短期のみの服用にしてほしい、と徳田医師は言う。

「EDはさまざま薬によつて引き起こされます。たとえば、スタチンやフィブロート系薬などのコレステロール低下薬。テストステロン（男性ホルモン）がコレステロールから合成されるからです。

また、降圧薬を飲んでい

Ds=非ステロイド消炎鎮痛薬）を含む湿布薬は注意が必要。光線過敏症といって、薬剤が紫外線と反応し、日焼けのような症状を起こすからです。実はこの成分は約四週間体内に残り、忘れた頃に症状が出ることがある。多くは湿布を貼つた部分に出ますが、アレルギー反応を起こし、他の部分に出ることもあります」

尿量の減少、血尿

せんそく、鼻づまり

N S A I D s はせんそく発作や強い鼻づまりなどを起すことがある。これを「アスピリンせんそく」と呼ぶが、せんそくの人は痛み止めだけでなく、中枢性鎮咳薬と呼ばれる咳止めにも注意してほしい。大阪府済生会中津病院小児科部長の清益功浩医師が語る。

「ぜんそくの持病がないのであれば、風邪で咳が止まらず、眠れない場合に中枢

EDを引き起こす薬が多い

性鎮咳薬を飲み、十回の咳を五回にするのも選択肢の一つかもしれません。

ですが、せんそくの場合には咳をして痰を出すことで気道を確保する必要がある。中枢性鎮咳薬を処方すると痰を出しにくくなり、結果として悪化することがあるので、せんそくの人に漫然と咳止めを出すのはよくありません」

それから、抗うつ薬（SSR-I や SNRI ）による ED もしばしば経験します」

A G A （男性型脱毛症）や前立腺肥大症治療に使われる 5 α 還元酵素阻害薬も ED を引き起こしやすいといふ。この薬を飲んで ED 気味になったという若い患者さんを実際に経験していま

薬は、副作用が出たとしても症状や病気の予防・改善のために使つたほうが多い場合がある。今回挙げた薬を絶対に飲んではいけないという訳ではない。だが、困った症状ばかりが出で、あまり役立っていないとしたら、無益どころか有害としか言いようがない。

もし「薬のせいかも」と思つたら、遠慮せず早めに主治医に相談してほしい。勉強熱心で良心的な医師ほど患者の話を否定せず、薬の影響の可能性も考え、減薬・中止・変更など適切な対応をしてくれるはずだ。

薬は使い方によって、文字通り「毒にも薬にも」なる。薬を飲むなら、このことを肝に銘じておきたい。

ED

この N S A I D s という種類の痛み止めには、消化性潰瘍の副作用もあり、食道や胃から出血して病院に

運ばれる人もいるという。それだけではなく腎臓や心臓を悪くする副作用もある。尿量の減少や血尿、むくみ、だるさなどがある場合は要注意だ。徳田医師が話す。

「とくに問題なのが、ロキソブロフェンです。腰痛や骨折後に飲み続けて腎不全や心不全を起こし、救急車で運ばれた高齢患者を立て続けに二例経験したことがあります。幸い命は取り留めましたが、腎機能は元の

レベルには戻りませんでした。作用が強いので使つくなる気持ちはわかりますが、飲むとしても一ヶ月間に留めるべきです」

この薬はドラッグストアでも市販されているが、安易に使える薬ではない。とにかく高齢者は腎機能が落ちている人が多いので、痛み止めを飲むなら比較的安心できるアセトアミノフェンの短期のみの服用にしてほしい、と徳田医師は言う。

また、降圧薬を飲んでい

る人に ED が多いとも言われており、とくにカルシウム拮抗薬、利尿薬、β遮断薬で ED のケースが報告されています。血圧が下がり過ぎると陰茎血流が低下するためでしょう。

それから、抗うつ薬（SSR-I や SNRI ）による ED もしばしば経験します」

A G A （男性型脱毛症）や前立腺肥大症治療に使われる 5 α 還元酵素阻害薬も ED を引き起こしやすいといふ。この薬を飲んで ED 気味になったという若い患者さんを実際に経験していま

す。ジビドロテストステロ

週刊文春

1月30日号 定価 440円

